



Title	第5章 エスニック・アイデンティティの形成と変容
Author(s)	新藤, こずえ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 35, 97-116
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61407
Type	departmental bulletin paper
File Information	500_ch5.pdf



第5章 エスニック・アイデンティティの形成と変容

新藤こずえ | 立正大学社会福祉学部講師

はじめに

本章では、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティの形成と変容について明らかにする。各地域のアイヌの特徴をより正確に捉えるため、使用するデータは、札幌市、むかわ町、新ひだか町、伊達市、白糠町で実施されたインタビュー調査と、『2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』（小内編 2010）のアンケート調査の結果とする。これらをもとに、アイヌとしての民族意識について、過去・現在・今後の時間軸に沿って検討する。また、調査対象者を青年層・壮年層・老年層の3つの年齢層に分け、世代によってエスニック・アイデンティティの形成と変容のあり方が異なることに着目する。

エスニック・アイデンティティは、過去から現在にいたるまでにライフコースのなかで経験したさまざまな事柄が影響している。とりわけアイヌ文化の実践と経験およびアイヌの人々が組織化されているアイヌ協会での取り組みが、アイヌの人々の民族意識の今後を左右することは、これまで行ってきた調査の分析、すなわち、札幌市・むかわ町（小内・長田 2012）、新ひだか町（新藤 2013）、伊達市（新藤 2014）、白糠町（新藤 2015）においても明らかにされてきた。これらの成果をふまえて検討を行う本章においても、これまでと同様の分析の視点を踏襲し、全体のなかでの各年齢層や地域による違いを浮かび上がらせることとする。なお、インタビュー調査の対象者のうちアイヌの養子となった和人や配偶者がアイヌである和人が含まれているが、その場合もアイヌの人々と同様の観点から分析した。

第1節 エスニック・アイデンティティの地域性

まず、インタビュー対象者のヒアリング結果全体にもとづいて、現在アイヌであることに対する意識を以下の観点から3つの群に分類した。①「肯定的である」は、「アイヌであることを誇りに思っている」「アイヌの文化を実践している」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「アイヌであることでつらい経験をしてきた」「アイヌであることがコンプレックスである」「アイヌであることを隠したい」など、アイヌであることに否定的な人々の意識である。③「どちらでもない」は、「アイヌであることをとくに意識しない」「アイヌの文化を知らない」「自身がアイヌであることを知らなかった」という人々の意識である。アイヌであることに対する全体的な意識としては、「肯定的である」が40.5%、「否定的である」が3.8%、「どちらでもない」が55.7%であった。3つの群のうち、「肯定的である」が最も多い割合であるのは、白糠（56.3%）のみであり、「肯定的である」と「どちらでもない」が同じ割合であるのは、新ひだか（49.1%）であった。札幌、伊達、むかわは「どちらでもない」が最も多い割合を占めていた。一方、「否定的である」の割合が最も多かったのは札幌の7.8%であった（表5-1）。

表5-1 アイヌであることに対する現在の意識（全体・地域別）（1）インタビュー調査

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
全体	107	40.5%	10	3.8%	147	55.7%	264	100.0%
札幌	23	45.1%	4	7.8%	24	47.1%	51	100.0%
伊達	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%
むかわ	22	36.0%	3	5.0%	36	59.0%	61	100.0%
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
白糠	27	56.3%	1	2.1%	20	41.7%	48	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

次に、アンケート調査におけるアイヌとしての現在の意識をまとめたものが表5-2である。全体としては、「つねに意識している」が13.5%、「意識することが多い」が13.9%、「時々意識する」が29.0%、「まったく意識しない」が43.5%であった。意識の有無は肯定的と否定的の両方を含む可能性があり、意識することが必ずしも肯定的な意味合いをもっているわけではない。しかし、「まったく意識しない」（43.5%）とインタビュー調査の肯定的でも否定的でも「どちらでもない」（55.7%）という意識が通じるとすると、インタビュー調査のほうが、全体としてアイヌであることに対して意識をしない人が多く含まれている。地域別の意識を見てみると、白糠においては「つねに意識している」が34.3%であり、「意識することが多い」「時々意識する」を加えると96.9%を占めている。表5-1でも「肯定的である」意識を持つ人が5地域の中なかで最も多く、白糠のアイヌの人々はアイヌとしての意識が高いといえよう。一方で、むかわと新ひだかは「まったく意識しない」が50%以上を占め、アイヌであることについて意識することが少なくなっている。しかし、表5-1を見てみると、「肯定的である」意識の人はむかわで36.0%、新ひだかで49.1%であり、意識の頻度が少なくてもアイヌであることを肯定的に捉える割合が高いことを示している。

表5-2 アイヌであることに対する現在の意識（全体・地域別）（2）アンケート調査

単位：人、%

	つねに意識している		意識することが多い		時々意識する		まったく意識しない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
全体	223	13.5%	230	13.9%	479	29.0%	719	43.5%	1651	100.0%
札幌	81	17.5%	72	15.6%	157	34.0%	152	32.9%	462	100.0%
伊達	25	14.4%	11	6.3%	56	32.2%	82	47.1%	175	100.0%
むかわ	62	10.0%	85	13.6%	163	26.2%	313	50.2%	623	100.0%
新ひだか	33	10.1%	35	10.7%	90	27.4%	170	51.8%	328	100.0%
白糠	22	34.4%	27	42.2%	13	20.3%	2	3.1%	64	100.0%

資料：2008年北海道アイヌ生活実態調査報告書より作成

では、過去の意識について見てみよう。インタビュー調査にもとづくアイヌであることに対する過去の意識の全体としては、「肯定的である」が11.4%、「否定的である」が31.1%、「どちらでもない」が57.6%であり、現在に比べて「肯定的である」が少なく、「否定的である」が多かった。地域別に見ても、3つの群の中なかで「肯定的である」が最も多い地域はなかった。一方、「否定的である」が最も多かった地域は新ひだか（57.6%）のみであり、ほかの4地域はすべて「どちらでもない」の割合が最も高かった（表5-3）。

表5-3 アイヌであることに対する過去の意識（全体・地域別）

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
全体	30	11.4%	82	31.1%	152	57.6%	264	100.0%
札幌	7	13.7%	17	33.3%	27	52.9%	51	100.0%
伊達	6	12.8%	4	8.5%	37	78.7%	47	100.0%
むかわ	5	8.2%	16	26.2%	40	65.6%	61	100.0%
新ひだか	7	12.3%	33	57.9%	17	29.8%	57	100.0%
白糠	5	10.4%	12	25.0%	31	64.6%	48	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

第2節 年齢層別のエスニック・アイデンティティ

次に、年齢層別に現在と過去の意識を確認する。ここでは、5地域のインタビュー調査およびアンケート調査の結果全体をまとめ、青年層（40歳代未満）、壮年層（40歳代以上60歳代未満）、老年層（60歳代以上）の3つの年齢層に分け、各年齢層の意識を見ていく。まず、インタビュー調査における現在の意識としては、「肯定的である」が最も多いのは老年層（54.5%）であり、壮年層と青年層は「どちらでもない」が多かった（壮年層63.0%、青年層63.5%）。また、各年齢層のうち、「否定的である」の割合が最も高いのは青年層の6.3%であった（表5-4）。

表5-4 アイヌであることに対する現在の意識（1）インタビュー調査
（年齢層別：札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	19	30.2%	4	6.3%	40	63.5%	63	100.0%
壮年層	33	33.0%	4	4.0%	63	63.0%	100	100.0%
老年層	55	54.5%	2	2.0%	44	43.6%	101	100.0%
合計	107	40.5%	10	3.8%	147	55.7%	264	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

アンケート調査における、意識の有無に関する項目と年齢層をクロスしたものが表5-5である。全体としては、「まったく意識しない」が最も多く43.6%であった。「つねに意識している」は13.4%であり、それに「意識することが多い」（14.0%）、「時々意識する」（29.0%）を加えると56.4%であった。各年齢層のうち、「つねに意識している」が最も多かったのは老年層（25.0%）であり、ついで壮年層（12.9%）、青年層（3.9%）であり、年齢層が低くなるほど、意識している人の割合も少なかった。一方、「意識する」場合の程度をはかる3つの選択肢のうちでは、各年齢層において「時々意識する」の割合が最も高く、青年層、壮年層、老年層でそれぞれ29.0%、30.2%、27.3%であった。

表5-5 アイヌであることに対する現在の意識（2）アンケート調査
（年齢層別：札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

単位：人、%

	つねに意識している		意識することが多い		時々意識する		まったく意識しない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	21	3.9%	50	9.2%	157	29.0%	314	57.9%	542	100.0%
壮年層	81	12.9%	103	16.4%	190	30.2%	255	40.5%	629	100.0%
老年層	118	25.0%	77	16.3%	129	27.3%	148	31.4%	472	100.0%
合計	220	13.4%	230	14.0%	476	29.0%	717	43.6%	1643	100.0%

資料：2008年北海道アイヌ生活実態調査報告書より作成

次に、インタビュー調査の結果にもとづく過去の意識を見てみると、各年齢層のいずれも「どちらでもない」の割合が高かった（青年層 71.4%、壮年層 64.0%、老年層 54.5%）。ついで青年層では、「肯定的である」と「否定的である」の割合がいずれも 14.3%であり、壮年層と老年層では「否定的である」の割合が高かった（壮年層 28.0%、老年層 32.7%）。各年齢層のうち「肯定的である」の割合が高いのは青年層（14.3%）である（表5－6）。以降では、現在の意識に関する具体的な語りを見てみよう。

表5－6 アイヌであることに対する過去の意識

（年齢層別：札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

単位：人、%

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	9	14.3%	9	14.3%	45	71.4%	63	100.0%
壮年層	8	8.0%	28	28.0%	64	64.0%	100	100.0%
老年層	13	12.9%	33	32.7%	55	54.5%	101	100.0%
合計	30	11.4%	70	26.5%	164	62.1%	264	100.0%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

まず、肯定的な意識を持つ人々の意識はどのような経験や考え方にもとづいて形成されたものなのだろうか。意識の形成過程に影響を与えたと見られる語りに注目してみよう。

- ・ 僕からいうと祖父ね、〇〇の部落で一応、酋長的な方だったんですね。（新ひだか・老年層・男性）
- ・ 今は、あたしはアイヌって、血統書付きのアイヌだって言ってます。ほかの、うちのお父さんたちみたいに半々じゃないから、両親ともあれだから、胸張ってますけれども。（新ひだか・老年層・女性）
- ・ なぜかスポーツ万能ですごく運動神経がいい。これはアイヌの血が混ざっているから、同級生とは驚異的に違っていた（中略）若い時に音楽が好きになって、すごいよ、自分で言うのもなんだけど。これもアイヌの血を引いているせいか、やっぱり普通の人とは違う。（伊達・老年層・男性）
- ・ シャクシャイン像見て感動。自分もこうなれたら良いなあっていうの。（新ひだか・壮年層・女性）
- ・ （差別的なことを）みんな言わなくなったし。アイヌの人は素晴らしいって言うし、いい技術を持っているとかね。〔社会が変わってきましたもんね〕 大事にしてくれるような気がする。（白糠・老年層・女性）
- ・ 毛深いことでアイヌであることを気にしていたが、夫が気にしない人だったので、誇りを持てるようになった。（札幌・老年層・女性）
- ・ 社会人になりお正月など実家に帰り親戚等が集まると、先祖代々のアイヌ文化を受け継ぐように両親や親戚から言われるような機会が続き、そういう話が積み重なってアイヌ民族としての自覚を持ち堂々とアイヌと言えるようになった。（札幌・青年層・男性）

このように、肯定的な意識を持つ人々は理由として、先祖がアイヌの酋長であったことや、両親ともにアイヌの血筋を引いていること、またアイヌの血筋であることで身体的能力や音楽の才能に優れていたこと、踊りなどのアイヌの文化活動に携わるようになったことをあげていた。また、シャクシャイン像を見て、アイヌの歴史を誇りに思うようになったことのほか、過去に差別の対象であったアイヌが、近年では「アイヌは素晴らしい」と言われるようになり、大切にされるようになったことがあげられた。つまり、アイヌの人々自身が血筋や文化活動、歴史を肯定的に捉えるようになった

たことのみならず、アイヌの人々を取り巻く社会の側がアイヌの人々が持つそれらの事柄を肯定的に捉えるようになったことを、アイヌの人々自身が認識し、エスニック・アイデンティティ意識の形成に影響を与えている。では、否定的な意識を持つ人々はどうであろうか。

- ・アイヌだというと、指差されて、汚い、感染る、寄るな、すごかったですね。もう臭いから寄るなどか、そういう汽車乗ってても、みんな白い目で見るとみたいな。顔でもうわかるみたいなの、そんな感じですね。顔で判断される。(伊達・青年層・女性)
- ・私たちは毛があるとかないとかで、ずいぶんいじめられてずっとやってきているのね(中略) 私たちがちょっと毛深いだけで、アイヌだとか言われること自体が、私にしたらとっても不愉快です。(中略) 誇りだなんて思ったこともないし、普通に生まれてきたかった。(伊達・壮年層・女性)
- ・アイヌって恥ずかしいことなんだなって思ったね。(中略) バカにされるからですよ。(伊達・壮年層・男性)
- ・一番最初の結婚、それ(毛深いこと、配偶者からメノコと言われたこと)が原因で別れたもん。(伊達・老年層・女性)
- ・自分が意識しなくても周りに意識されるんで、劣等感ありますよね。(新ひだか・青年層・女性)
- ・小さい時からそういうもんだって思ってるから、わかってるんだけど周りにわからないようにしてるっていうのかな、それが現状です。(新ひだか・壮年層・女性)
- ・結婚する時に相手の親からアイヌであることで反対された(むかわ・壮年層・男性)

以上のように、否定的な意識を持つにいたる経緯には、過去に差別やいじめを受けた経験があり、そのときの意識や状況が現在も続いていることがあげられる。アイヌであることを「誇りだなんて思ったことはない」「普通に生まれてきたかった」「アイヌって恥ずかしい」などの意識である。また、離婚の原因が配偶者から受けた差別である人も見られた。また、直接的な差別でなくても、アイヌであることを「周りに意識される」劣等感や、そのコンプレックスのために「周りにわからないようにする」というように、アイヌであることを隠したいという意識が見られた。実際にアイヌであることで結婚を反対されたというケースもあった。では、全体の半数以上の人々が持つ、肯定的でも否定的でもない意識はどのようなものなのであろうか。

- ・(アイヌ民族だと意識することは)ないな。どういうふうに思うんだろうね。それって、私が日本人だと思うことと同じぐらいかな、感覚的に。(白糠・青年層・女性)
- ・別にアイヌとか、あまり区別したことないし、そういうのはあまり。同じ日本人だからさ、そんなこと考えてないんだけど。(伊達・老年層・男性)
- ・25, 6歳になるまで自分にアイヌの血が流れていることを知らなかったし、家庭ではまったくアイヌとしての生活をしたことはない。(新ひだか・老年層・男性)
- ・〇〇(地域名)にいる人がたが、ある程度、そういう血筋の人が多から、それが特別に思ったことはないし、普通に。(白糠・壮年層・女性)
- ・アイヌであることを隠しはしないが、こだわらなくていい。(札幌・壮年層・男性)

アイヌであることを意識しないという人々のなかには、「同じ日本人」なのでアイヌと和人の違いを意識しないという考え方や、自身がアイヌの血筋であることを知らず、アイヌの文化に触れる生活をした経験がないために意識しないという人が含まれていた。それ以外にも、周囲にアイヌの人々が多かったため、とくに周囲との違いを意識しなかったというものもあった。しかし、表5-3および6に見られるように、インタビュー調査とアンケート調査において、アイヌであることに對する意識としては、過去に否定的な意識を持つ人が全体の3割前後を占めている。一方で現在、否定的な意識を持つ人は全体の3.8%である（表5-1、3）。このような、過去に「否定的である」意識の人が、現在「どちらでもない」意識を持つようになったケースに着目してみると、次のような語りが見られる。

- ・ 私たちの小さい時代って、なんかこう「アイヌ」とかってバカにされた言葉を吐かれて嫌な思いをしたり（中略）（現在は）ただ普通に受け入れてますよね。（伊達・壮年層・女性）
- ・ 毛深いのは気にしましたよ。あと、子どもが毛深いのは嫌だなんていうのはちょっとありますけどね。自分の血はあまり引いてほしくないなと。とりあえずうちの時代よりは、教育がある程度しっかりしてきているから、そういう偏見というのは減りましたよね。（新ひだか・壮年層・男性）
- ・ 何だかんだといったって、アイヌの血を引いてるから。シャモにはなれないですね。（新ひだか・老年層・男性）

このように、過去に否定的な意識であったが、現在はアイヌであることを受容しているケースや、「シャモにはなれない」という「開き直り」とも「あきらめ」ともとれるような自己意識を持つにいたったケースのほか、現在は教育によって偏見が減少してきたために、かつてコンプレックスであった毛深いということもあまり気にならなくなったというケースも見られた。次に、自身がアイヌであることについて、「肯定的」と「否定的」の両方の意識を持つために、「どちらでもない」意識に含まれた人の語りを見てみよう。

- ・ 自分の子どもを産むと、その自分の子どもが見た目的に毛深いかどうかとって気になるんですよ、すごく。私のせいでこの子たちが毛深いんじゃないかとかと思って…（中略）顔に特徴があって、目鼻だちがはっきりしてて、いいと思うところはあるんですよ。（新ひだか・壮年層・女性）
- ・ 小学校のときは楽しくてやっていたけど、ある程度物心がついてあれだったときは、嫌だなと思ったこともあるし、それに対していじめもあったしね。一言で簡単には言えないね。やっぱり今までやってきたことに対して、いいか悪いかというのは。（白糠・青年層・女性）

アイヌの人々の身体的な特徴について、毛深いことに対する否定的な意識と、目鼻立ちがはっきりしていることに対する肯定的な意識の両方を持っている。つまり、身体的な特徴は自身にとっては美醜の両方を合わせ持っていることになり、劣等感と優越感を抱えることになっている。これまで見てきたとおり、肯定的な意識を持つ人は、先祖が指導的な立場にあったということやアイヌの血筋の確かさ、アイヌの文化や歴史を誇りに思うことで、「和人とは違う」あるいはアイヌのなかでも自身が特別な位置にいるということが、優越感につながっていると捉えることもできる。一

方、見た目でアイヌの血筋とわかることが劣等感につながると否定的な意識となる。そのため、アイヌであることに対する意識が肯定的か否定的かということは、「一言では簡単には言えない」であろう。しかしながら、少なくとも否定的な意識が「どちらでもない」意識や肯定的な意識に変化する過程には、アイヌの人々自身のみならず、周囲の人々や社会の側が捉える「アイヌ民族」の位置づけやアイヌの人々に付加するイメージも、エスニック・アイデンティティの形成や変容に影響を与えているといえよう。

第3節 アイヌ文化の実践とアイヌ協会への関わり

次に、エスニック・アイデンティティに影響をおよぼすアイヌ文化の実践について見ていく。札幌・むかわのインタビュー調査結果から、アイヌであることを自覚するに至るきっかけとして、アイヌ文化（25.5%）、親（22.4%）あるいは家族・親戚（19.4%）、友人らからの指摘（23.5%）であることが明らかになっている（野崎 2010）。また、これまでのインタビュー調査によれば、アイヌ文化への関わりはアイヌ協会が開催するイベントや講座などを通して行われているケースが多いことが明らかになっている（新藤 2013, 2014, 2015）。そこで、本節ではアイヌ文化の実践およびアイヌ協会への加入状況と、エスニック・アイデンティティについて確認する。

まず、インタビュー調査では、アイヌ文化の実践について、全体の 54.9%が「あり」、45.1%が「なし」と答えた。実践している割合が最も高い地域はむかわ（67.2%）であり、ついで札幌（64.7%）、白糠（56.3%）、最も少ない地域は伊達（36.2%）であった（表5－7）。年齢層別に見てみると、実践しているアイヌ文化がある者が最も高い割合であったのは老年層（67.3%）であり、ついで青年層（52.4%）、壮年層（44.0%）であった（表5－8）。

表5－7 アイヌ文化の実践（全体・地域別） 単位：人、%

	実践している文化			
	あり		なし	
全体	145	54.9%	119	45.1%
札幌	33	64.7%	18	35.3%
伊達	17	36.2%	30	63.8%
むかわ	41	67.2%	20	32.8%
新ひだか	27	47.4%	30	52.6%
白糠	27	56.3%	21	43.8%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

表5－8 アイヌ文化の実践（年齢層別：札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計） 単位：人、%

	実践している文化			
	あり		なし	
青年層	33	52.4%	30	47.6%
壮年層	44	44.0%	56	56.0%
老年層	68	67.3%	33	32.7%
合計	145	54.9%	119	45.1%

資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

次に、アイヌ協会への加入状況についてまとめたものが表5－9である。札幌・むかわでは、アイヌ協会への加入状況を尋ねる項目がなかったため、伊達、新ひだか、白糠の3地域についての状況となる。なお、2008年のアンケート調査では、北海道ウタリ協会（当時）（2009年4月に北海道アイヌ協会に改称）会員、道内在住の元協会員、アイヌ民族であることが明確な道内在住の非会員が属するすべての世帯と18歳以上85歳未満の世帯構成員全員としていた。また、インタビュー調査においても、北海道アイヌ協会事務局の全面的な協力のもと実施したため、調査への協力が可能ということ自体がアイヌ協会への関わりを前提とするものであるが、各地域の調査では加入していない人も含まれている。

インタビュー調査において加入している割合が最も高いのは伊達（80.9%）であり、低いのは白糠（67.6%）である。しかし伊達は、アイヌ文化を実践している人の割合が最も低く（36.2%）、白糠は56.3%であり、新ひだか（47.4%）よりも高い（表5－7）。白糠では、アイヌ協会のほかに白糠アイヌ文化保存会があり、古式舞踊（リムセ）を中心に、イナウ作りなどのアイヌ文化の保存・伝承活動を積極的に行っている（世良・小内 2015）。しかし、たとえば白糠においてアイヌ文化を実践している青年層は81.3%であるのに対し、アイヌ協会に加入している人は62.5%、白糠アイヌ文化保存会に加入している人は56.3%であり、協会や保存会に加入していなくてもアイヌ文化を実践しているケースが見られる（新藤 2015）。なお、白糠では壮年層と老年層においても同様の傾向であった。

また、エスニック・アイデンティティとの関わりで見ると、アイヌであることに対する現在の意識について、「肯定的である」の割合が最も高いのは、白糠（56.3%）であり、最も低いのは伊達（14.9%）であった（表5－1）。このことから、アイヌ協会はアイヌ文化活動を実践するうえで、重要な役割を果たしてきているものの、加入率の高さとエスニック・アイデンティティを肯定的に捉える人の割合の高さは必ずしも比例していない。このことは、アイヌ協会加入の動機が文化活動への参加のみではないことを示唆している。年齢層別のアイヌ協会への加入状況を見ると、老年層が86.5%、壮年層が80.4%、青年層が63.6%である（表5－10）。このなかで、壮年層は、アイヌとしての意識が「肯定的である」の割合が低く、文化活動への参加も低いが、80.4%がアイヌ協会に加入している。以降は、アイヌ文化の実践およびアイヌ協会への加入とエスニック・アイデンティティに関わる各年齢層の具体的な語りである。

表5－9 アイヌ協会への加入（3地域）

単位：人、%

	加入している		加入していない		わからない・不明		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
伊達	38	80.9%	7	14.9%	2	4.3%	47	100.0%
新ひだか	48	84.2%	7	12.3%	2	3.5%	57	100.0%
白糠	25	67.6%	11	29.7%	1	2.7%	37	100.0%

注）札幌・むかわでは、アイヌ協会への加入状況に関する調査項目を設けていない。

資料：インタビュー調査（2012～2014年）報告書より作成

表5-10 アイヌ協会への加入（年齢層別：伊達、新ひだか、白糠の合計） 単位：人、%

	加入している		加入していない		わからない・不明		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	21	63.6%	10	30.3%	2	6.1%	33	100.0%
壮年層	45	80.4%	10	17.9%	1	1.8%	56	100.0%
老年層	45	86.5%	5	9.6%	2	3.8%	52	100.0%
合計	111	78.7%	7	5.0%	2	1.4%	141	100.0%

注）札幌・むかわでは、アイヌ協会への加入状況に関する調査項目を設けていない。

資料：インタビュー調査（2012～2014年）報告書より作成

まず、青年層におけるアイヌ文化の実践とエスニック・アイデンティティに関わる語りについて見てみよう。

- ・ 小さい頃から保存会入って、踊ることが当たり前で、儀式に参加することが当たり前になってしまってたので。（新ひだか・青年層・女性）
- ・ （アイヌの）お祭り自体は結構、慣れ親しんでいるから。でも、実際にちゃんと参加していないからわからないんですけど。アイヌで良かったなみたいな感じで。（白糠・青年層・女性）
- ・ 今踊りをやってるので、そのときには（自身がアイヌであることを）意識するというか。（白糠・青年層・女性）
- ・ 高校出てからとか、社会人になってからいろいろ。伝統的なこと見たり聞いたりして。いろいろ歴史を知るとやっぱり…。もうこの文化は絶やさない方がいいなって思いますね。（新ひだか・青年層・男性）

このように、保存会での踊りやアイヌのお祭りなど、アイヌの伝統的な文化活動や歴史に触れる経験から、肯定的なエスニック・アイデンティティを持つようになった人々が見られる。その関わり方は、儀式への参加、お祭りへの参加、アイヌ伝統舞踊の実践などさまざまである。一方で、自身はアイヌであるが、アイヌ文化に携わる経験がほとんどない人々も存在していた。こうした人々にとってのアイヌ文化は、博物館やカルチャーセンターにあるものとして捉えられている。

- ・ イナウって何ですか？（伊達・青年層・男性）
- ・ 〔知っているアイヌ文化はありますか？〕 刺繍。〔アイヌ文様の刺繍ですね。どこで知ったのですか？〕 博物館に行った時に。（伊達・青年層・男性）
- ・ カルチャーセンターって伊達にあるんですけど、そこで口でやるビョンビョンみたいな。〔社会見学みたいな感じで、小学校のときに行ったという？〕 はい、それぐらいですかね。（伊達・青年層・女性）

次に、壮年層におけるアイヌ文化の実践について見ていく。青年層に比較すると壮年層は、アイヌ協会や保存会で実施されるアイヌ文化に参加するとともに、子どもの頃に日常生活のなかでアイヌ文化を体験している。

- ・（シャクシャイン祭りなどの行事を）自分がこうやって一緒にやっているというのが自分もアイヌってということだから。（新ひだか・壮年層・女性）
- ・父親がアイヌのカムイノミの伝承者で…。（新ひだか・壮年層・男性）
- ・（アイヌ三大祭りは）やっぱりアイヌ民族がみんな一つになってまとまってやれる大事な行事なので、すごく心のよりどころにみんななっていて、いいと思いますね。（白糠・壮年層・女性）
- ・（踊りは）子どものときから身につけてる。何十年も大人になってやってなくて、ちょっとやってごらんって言ったら、体が反応して動けるっていうか、踊れるっていうか。（白糠・壮年層・女性）
- ・カムイノミとかはやっぱり。うちの夫も一生懸命やりますね。先祖供養もしますね。必要だと思っています。夢見を大事にしたり、夢も見ると、アイヌ語もやっていますね。歌と踊りもやっています。刺繍もします。料理もしますね。（白糠・壮年層・女性）

このように、壮年層におけるアイヌ文化は、現在におけるシャクシャイン法要祭などの行事への参加のほか、子どもの頃からアイヌの伝統舞踊や先祖供養に触れてきた体験などがある。その他にも、アイヌ語や歌なども日常生活の中で実施している。加えて、親がアイヌ文化の伝承者である人もいた。次に、老年層におけるアイヌ文化の実践とエスニック・アイデンティティに関わる語りについて見ていく。

- ・トンコリやムックリを習っている時やお盆を彫っている時、着物を縫っている時など、アイヌの文化に触れている時にアイヌであることを意識する。（伊達・老年層・女性）
- ・先祖供養って、「あー、すごい立派なことやってるんだな」と思ったのと、そういうあれ（シャクシャイン法要祭）に参加できる自分が何か嬉しいなという気がして。だから積極的になるようになった。（新ひだか・老年層・女性）
- ・自覚したのは、保存会活動するようになってからかな（中略）踊りとか儀式とか。（新ひだか・老年層・男性）
- ・（アイヌの伝統工芸作品で）賞もらったことあるんだよね。（新ひだか・老年層・男性）
- ・（アイヌの歌を歌ったら）やっぱり世間は大事にしてくれるよ。私は文化人だって。（白糠・老年層・女性）
- ・最初はアイヌ民族の1人として意識することはなかったけれど、アイヌ協会の仕事を手伝ったり、アイヌ民族の踊りを見たりする時にだんだんと意識するようになった。（新ひだか・壮年層・女性）
- ・アイヌ文化を勉強すると、こんな素晴らしい文化がある民族って、いいなと思ったの。（白糠・老年層・女性）

老年層においても、青年層や老年層と同様に、保存会やアイヌ協会でのアイヌ文化活動に参加するなかで、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティの高まりを経験しているという語りが見られる。伝統工芸作品や歌を披露するなかで、自身がアイヌという希少な存在であることを意識するようになっている。また、アイヌ協会の運営に携わったり、アイヌ文化を学習したりする経験をととして、アイヌとしての自己を肯定的に捉えるようになっていた。一方で、「協会に入ってます

から、いろんな今のシャクシャインの儀式にも出てますし、イチャルパやりますし。でも、個人ではイナウも何もありますから」（新ひだか・壮年層・男性）というように、個人の日常生活ではアイヌ文化を実践していない者も多い。したがって、アイヌ協会が実施する行事は、人々をアイヌ文化につなぎとめる役割を果たしているといえよう。一方で、各年齢層において、アイヌ文化を肯定的には捉えられない人々がいる。

- ・（アイヌ文化を）素晴らしいとは思ってないです（白糠・老年層・女性）
- ・アイヌ民族のひとりであると自覚したことはないし、自覚するようなきっかけもなかった。アイヌ協会に入っているが、自分自身がアイヌ民族のひとりであると考えたことはない。普段心がけているアイヌ文化や関わってみたいと考えているアイヌ文化はない。（新ひだか・壮年層・女性）
- ・アイヌの女性が編む、ござ編みとかしたり、（アイヌ文化伝承者である父に）「おまえもアイヌ人だし、そういう血も引いてるし、そういう（伝承する）人になんなさい」と言われたんですけど（中略）重荷だなと思うし、何かそこまでして、私がアイヌを引き継がなくてももう現代人だしなと思ってやめました。（伊達・青年層・女性）

このように、肯定的に捉えられない人々の意識もさまざまである。アイヌである自覚がないことやアイヌ文化を素晴らしいとは思えないというケースのほか、アイヌ文化伝承者を父に持ち、アイヌ文化に対してマイナスのイメージを持っているわけではないものの、自身が伝承者になるよう言われると、それを重荷に感じてしまい肯定的には捉えられなくなっていた。各年齢層においてアイヌ協会における文化活動の実践が見られたが、次のように、アイヌ協会への加入は文化活動のみが目的であるわけではない。

- ・その頃ウタリ協会で、機動訓練っていうのをやったんですよ。職業機動訓練っていう。それで、そこに入ると10万ぐらいの手当てをもらいながら色々な文化を、刺繍であったり着物作りであったり。で、色んな事をやったんですよ。それに入って刺繍も覚えたり、そういう技術の習得のために（協会に）入ったっていうのがきっかけですね。べつにアイデンティティとかはなかったです、きっかけには。[じゃあ、お子様の高校進学と、ご自身の。] そうそう。家庭環境ですね。家庭の中の諸事情ですよ。（白糠・老年層・女性）
- ・（機動訓練で）刺繍（を習った）。（中略）生活してたからそこに、ましてお金がもらえたり。すごい大きいお金もらえた。（白糠・老年層・女性）
- ・[どうして参加したいと思ったんですか?] 受講すれば金くれる（中略）これ年間4、5万くらいくれるよ。[元々関心があったという訳では?] そんなもの（ない）。（伊達・老年層・男性）

アイヌ文化活動以外のアイヌ協会加入の動機については、加入によって受講しやすくなる、刺繍などのアイヌの伝統文化を習得するという機動訓練により、収入を得られるというメリットが語られていた。こうした活動は、アイヌ文化に触れる機会になっており、また、金銭面での対価を得られるという語りが見られたものの、「家庭の中の諸事情」により受講したという語りがあるように、必ずしもエスニック・アイデンティティの醸成にはつながっていない。機動訓練のほかに、アイヌ

協会への加入の動機として、すべての年齢層で語られたのは、教育費（奨学金）の給付貸付や住宅資金の貸与などの制度利用である。

- ・アイヌで生まれたおかげで、息子もその協会の学費援助してもらってっていう、これは素晴らしい制度だと思うし、感謝して高校卒業させたっていうこと、それはもう子どももわかっている。(新ひだか・壮年層・女性)
- ・(教育費の給付で進学した子どもたちに) だから「父親がアイヌだからこうやって援助がもらえるんだよ」っていうことを言ってます。(伊達・壮年層・女性・和人)
- ・ウタリ協会に感謝しているのは、住宅支援なんかいろいろなのがあって、それを借り入れてもう25年で完済するの。だからありがたかったと思っています。それと高校入学の時も奨学金などもあって、すごく助かったんです。(伊達・壮年層・女性)
- ・住宅資金、家も建ててあげようと思っていたみたいで、その関係で入ったというのがあったみたいで(中略)(なるべく早く入っておいたほうが)心証が良くなるんじゃないかというような感じで。(伊達・壮年層・女性・和人)
- ・(アイヌ協会には) なんかあった時は助けてもらえるからって言われて。実際にうち建てる時は金借りたけど。金借りて自分で建てたから。普通の人の3分の1で建てて。(伊達・老年層・男性)
- ・ゆくゆくはお世話になるだろうという頭もあるんで、うん、今のうちからでもね、ちゃんと入って貢献、その時ばかりお世話になるんじゃないかって、今からちゃんと、うん、やってこうと思って。(新ひだか・青年層・女性)

アイヌであるがゆえに、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付制度が利用できることは、人々の生活にとって大きなメリットであり、「素晴らしい制度」「助かる」「ありがたい」という語りが見られた。こうした制度が、エスニック・アイデンティティにどのような影響をおよぼすのかは明確ではないが、少なくともマイノリティであり、「アイヌ民族っていうのは、今でも本当に、大半が生活保護を受けて生活してる人がほとんどですの、やはりね、お金が出るっていうことはね、やっぱりみんなの生活にとっては一番喜ばしいことなんですよ」(白糠・老年層・女性)というように、和人に比較すると経済的困難を抱えているのがアイヌであるというエスニック・アイデンティティと向き合わねばならない。教育費の給付貸付を利用する直前に加入するのではなく、早めに加入することによって「心証が良くなる」という効果をねらっているケースも見られた。一方で、こうした制度利用のメリットを得るためだけにアイヌ協会に加入することについて、ネガティブなイメージを持っている人もいる。

- ・(アイヌ)協会に入ればそういうの(教育費の給付)を自分の子どもも受けられるって聞いてたけど、どうしてもそういう協会に入るのがね、いまだに俺はイヤなの。イヤだっていうのは、それほど小学生の時のいじめが…尾を引くっていうかね。(白糠・青年層・男性)
- ・全般的に、アイヌ民族をきっかけにしてお金をもらおうとしていることが見え見え(中略)そういう人たちの中には参加したくない。自分は自分なりに精一杯生きている。(白糠・壮年層・男性)

このように、子ども時代にいじめられた否定的な経験が尾を引いているために、アイヌ協会に加入することにためらいがあるというケースや、アイヌであることを理由に経済的なメリットを得ようすることに批判的であるがゆえに、協会には加入しない場合もある。

以上のことから、アイヌの人々によるアイヌ協会への関わりには、アイヌ文化に触れ、そしてアイヌ文化を継承する「主体」としての関わりと、教育費の給付貸付や住宅資金の貸付制度などの制度の利用者としての「客体」としての関わりの両面があるといえよう。とりわけ金銭が直接的に得られることは、アイヌの人々が協会に加入する動機になっている。全体としては、アイヌ協会が提供するアイヌ文化の体験は、アイヌである自分を肯定的に捉え、アイヌ民族の誇りを取り戻すあるいは感じるようになる機会になっている。しかし、金銭的なメリットが人々をアイヌ協会につなぎとめているという側面は軽視できない。したがって、アイヌ協会への加入と関わりは、アイヌ文化の保存・伝承・発展に携わるという動機と、経済面での実利的な動機が絡まり合いながら、エスニック・アイデンティティに影響をおよぼしているといえるだろう。

第4節 エスニック・アイデンティティと今後

では、アイヌの人々は今後、自身のエスニック・アイデンティティをどのように捉えていくのだろうか。こうした人々の今後の生活の意識について、インタビュー調査とアンケート調査いずれにおいても、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「とくに民族は意識せず生活したい」の3つの選択肢から最も近いものを選択する方法をとったが、いずれにもあてはまらない場合は「その他」とした。表5-11、12、13では、「アイヌとして積極的に生きていきたい」を「積極的」、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」を「消極的」、「とくに民族は意識せず生活したい」を「どちらでもない」として表記した。

インタビュー調査全体としては、「どちらでもない」が50.8%で最も多く、ついで「積極的」が43.6%であった。「消極的」は全体でも1.9%のみであり、最も高い地域でも4.9%（むかわ）であった。地域別に見ると、「積極的」が最も高い地域は札幌（64.7%）であり、ついでむかわ（55.7%）、新ひだか（36.8%）、最も低い地域は伊達（14.9%）であった。3つの選択肢のうち「積極的」が最も高かったのは、札幌のほかは、むかわのみであった（表5-11）。

アンケート調査においても、「どちらでもない」が最も多く、全体の73.4%を占めていた。「積極的」は19.1%、「消極的」は6.0%であった。インタビュー調査と比較すると、アンケート調査では、「どちらでもない」が22.6ポイント高く、「積極的」は24.5ポイント低かった。一方で「消極的」は4.1ポイント高かった。地域別に見ると、「積極的」が最も高い地域はインタビュー調査と同じく札幌（26.0%）であり、ついで新ひだか（18.7%）、むかわ（15.1%）、最も低いのは白糠（12.1%）であった。「積極的」が最も高い札幌であっても、インタビュー調査と比較すると38.7ポイント低く、伊達（14.6%）以外の4地域すべてにおいて、インタビュー調査よりもアンケート調査において「積極的」の割合が低かった（表5-12）。このように、インタビュー調査に比べるとアンケート調査においては全般的に「積極的」の割合が低く、「どちらでもない」「消極的」の割合が高くなっている。このことは、調査協力者の特性であると考えられる。すなわち本調査では、アイヌ協会および各地域のアイヌ協会を通じてインタビュー調査の依頼をしたことから、調査への協力を承諾するという意味では、アイヌ文化の実践などを通して協会と何らかのつながりがある人であり、アイヌと

しての意識が比較的高い人の割合が高くなっていると推測される。

表5-11 アイヌであることに対する今後の意識（全体・地域別）（1）インタビュー調査 単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
全体	115	43.6%	5	1.9%	134	50.8%	10	3.8%	264	100.0%
札幌	33	64.7%	1	2.0%	17	33.3%	0	0.0%	51	100.0%
伊達	7	14.3%	0	0.0%	39	83.0%	1	2.1%	47	100.0%
むかわ	34	55.7%	3	4.9%	24	39.3%	0	0.0%	61	100.0%
新ひだか	21	36.8%	1	1.8%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
白糠	20	41.7%	0	0.0%	25	52.1%	3	6.3%	48	100.0%

注）札幌・むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

資料：インタビュー調査（2012～2014年）報告書より作成

表5-12 アイヌであることに対する今後の意識（全体・地域別）（2）アンケート調査 単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
全体	167	19.1%	641	6.0%	52	73.4%	13	1.5%	873	100.0%
札幌	76	26.0%	183	7.9%	23	62.7%	10	3.4%	292	100.0%
伊達	12	14.6%	65	3.7%	3	79.3%	2	2.4%	82	100.0%
むかわ	44	15.1%	230	5.8%	17	79.0%	0	0.0%	291	100.0%
新ひだか	28	18.7%	113	6.0%	9	75.3%	0	0.0%	150	100.0%
白糠	7	12.1%	50	0.0%	0	86.2%	1	1.7%	58	100.0%

注）札幌・むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

資料：2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書より作成

年齢層別に見てみると、インタビュー調査において、アイヌであることに対しての今後の意識として「積極的」な割合が最も高いのは老年層（50.5%）であり、ついで青年層（46.0%）、壮年層（35.0%）であった。壮年層は「どちらでもない」が60.0%で最も多く、青年層は「どちらでもない」が47.6%であり、「積極的」の割合とほぼ同じであった。一方で、3つの年齢層のうち、「消極的」である者が最も多いのは青年層（3.2%）であった（表5-13）。

アンケート調査では、各年齢層において「どちらでもない」の割合が最も高く、すべての年齢層で70%を超えていた。一方、「積極的」の割合が最も高いのは、インタビュー調査と同じく老年層（25.9%）であり、ついで壮年層（18.0%）、青年層（11.7%）であった。しかし、表5-13および14で確認したとおり、年齢層別に見た意識においても、インタビュー調査と比較するとアンケート調査では、各年齢層例外なく「積極的」の割合は低くなっている。また、「消極的」が最も多いのはインタビュー調査と同じく青年層の8.9%で、インタビュー調査と比較すると5.7%ポイント高く、「消極的」な意識を持つ青年層は老年層（3.3%）の約3倍であった（表5-14）。

表5-13 アイヌであることに対する今後の意識（年齢層別）（1）インタビュー調査
（札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		不明・その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	29	46.0%	2	3.2%	30	47.6%	2	3.2%	63	100.0%
壮年層	35	35.0%	1	1.0%	60	60.0%	4	4.0%	100	100.0%
老年層	51	50.5%	2	2.0%	44	43.6%	4	4.0%	101	100.0%
合計	115	43.6%	5	1.9%	134	50.8%	10	3.8%	264	100.0%

注）札幌・むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

資料：インタビュー調査（2012～2014年）報告書より作成

表5-14 アイヌであることに対する今後の意識（年齢層別）（2）アンケート調査
（札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		不明・その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	25	11.7%	19	8.9%	164	77.0%	5	2.3%	213	100.0%
壮年層	64	18.0%	22	6.2%	263	74.1%	6	1.7%	355	100.0%
老年層	78	25.9%	10	3.3%	212	70.4%	1	0.3%	301	100.0%
合計	167	19.2%	51	5.9%	639	73.5%	12	1.4%	869	100.0%

資料：2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書より作成

アイヌであることに対する過去・現在・今後の3つの時間軸に沿って意識を整理したものが表5-15である。まず、インタビュー調査では、アイヌであることに対して「肯定的」あるいは「積極的」な（以下、「肯定的／積極的」）人が、過去、現在、今後の順で多くなっている。一方で、アイヌであることについて「否定的」あるいは「消極的」な人（以下「否定的／消極的」）は過去、現在、今後の順に少なくなっている。「どちらでもない／意識しない」人は3つの時間軸のいずれの時点においても全体の約半数を占めている（表5-15）。これまでの調査の分析によれば、過去に「否定的／消極的」であった人の意識が「肯定的／積極的」あるいは「どちらでもない／意識しない」に変化したケースと、過去に「どちらでもない／意識しない」という人が「肯定的／積極的」に変化したケースがある（小内・長田 2012、新藤 2013, 2014, 2015）。

アンケート調査では、過去の意識を尋ねる項目がなかったため、現在と今後の意識を比較した（表5-16）。「意識するか、しないか」という意識の有無や頻度と、「積極的か、消極的か」という意識の程度は単純に比較することはできない。しかし、少なくとも、無意識であることは、「積極的か、消極的か」という意識すら持っていないということである。つまり、現在、何らかの意識がある人（「つねに意識している」「意識することが多い」「時々意識する」）56.5%が、「積極的か、消極的か」という選択をすると前提した場合、今後の意識において「積極的」が19.2%、「消極的」が5.9%であることは、現在から今後にかけてエスニック・アイデンティティの無意識化が進行することを示唆している。

表5-15 アイヌであることに対する過去・現在・今後の意識（1）インタビュー調査
（札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計） 単位：人、%

	肯定的／積極的		否定的／消極的		どちらでもない ／意識しない		その他	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
過去	30	11.4%	82	31.1%	152	57.6%	—	—
現在	107	40.5%	10	3.8%	147	55.7%	—	—
今後	115	43.6%	5	1.9%	134	50.8%	10	3.8%

注）札幌・むかわ調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記
資料：インタビュー調査（2009～2014年）報告書より作成

表5-16 アイヌであることに対する現在・今後の意識（2）アンケート調査
（札幌、伊達、むかわ、新ひだか、白糠の合計）

【現在】 単位：人、%

	つねに 意識している		意識することが 多い		時々意識する		まったく 意識しない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
現在	223	13.5%	230	13.9%	479	29.0%	719	43.5%	1651	100.0%

【今後】 単位：人、%

	積極的		消極的		どちらでもない		不明・その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
今後	167	19.2%	51	5.9%	639	73.5%	12	1.4%	869	100.0%

資料：2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書より作成

次に、インタビュー調査の結果にもとづき、「アイヌとして積極的に生きていきたい」（43.6%）、「とくに民族は意識せず生活したい」（50.8%）という人々の語りを見ていく。「極力アイヌであることを知られずに生活したい」（1.9%）はほとんどいなかったが、「過去のことはまったく知らないし、知りたくもない。アイヌの言葉、伝統行事のことはまったく知らないし、過去のトラウマがあり覚えたいとも思わない」（新ひだか・老年層・男性）という考えを持つ人もいた。以下は、「アイヌとして積極的に生きていきたい」という人々の意識である。

- ・ アイヌを誇りに思うね。（中略）自分たちは子どもの時から、親がそうやってアイヌのあれ（文化活動）で一生懸命やってた、それを見てるから。（伊達・老年層・女性）
- ・ 文化は伝承していきたいんですけど（中略）もっと小さい子に（踊りを）教えていきたいですね、私は。（白糠・青年層・女性）
- ・ やっぱりアイヌ民族の精神文化とか、昔の人が受け継いできた優しい心というか、自然に対しての優しい心とか、そういうのを子どもたちになるべく伝えていけたらと思います。（白糠・壮年層・女性）
- ・ 年寄りの人たちと対等っていったらおかしいけど、（アイヌ語で）言ってることがわかるくらいにはなりたいよね。（新ひだか・壮年層・男性）
- ・ （アイヌだと表明して生きることは）だって自分が楽だもの。だってさ、自分は隠して生きてきたってどうしようもない。外見からそうだから。だから積極的に生きているほうが、相手も受け入れやすいと思う。（白糠・老年層・女性）
- ・ 祖先の苦しみとか悲しみとか、そういうものをうやむやにしたくないなっていう。（白糠・老年層・

女性)

- ・アイヌ同士が、アイヌ自身もやっぱり外に向けて発信するっていう意識をもっと持っていかなきゃだめなのかなっていうのは思いますね。(新ひだか・青年層・男性)

このように、親世代がアイヌの文化活動に取り組む姿を見て、「アイヌを誇りに思う」という人や、自身が子どもたちにアイヌ伝統舞踊やアイヌの人々の精神文化を伝承していきたいと考える人、これからアイヌ語を学びたいというケースが見られた。アイヌとして生きることは「自分が楽」であり、アイヌとして「積極的に生きているほうが、相手も受け入れやすいと思う」という考えを持っている。また、祖先の苦しみや悲しみをうやむやにしたくないために、アイヌとして積極的に生きていきたいという語りもあった。このように、積極的なエスニック・アイデンティティを持つ人は、自分自身がアイヌ文化の担い手となり、「アイヌ同士が、アイヌ自身もやっぱり外に向けて発信する」というように前向きな意識を持っている。次に、最も多い割合を占める「とくに民族は意識せず生活したい」意識をもつ人々の語りに着目してみよう。

- ・自分がそんなにそういう民族の家系であるということを意識していないから。(子どもへの告知についても) とくにないんだけど、うちの親とかもそんなにアイヌの血が、ほとんど薄いみたいな感じで言われていたので、とくに告知とかする気はないかな。(伊達・壮年層・女性)
- ・とくに意識は、今まででもそうだけどそんなに意識はしたことないから、このままでいいかなと。(伊達・青年層・男性)
- ・今は何もしていないので、とくに民族は意識せず生活したい。何かに携わっていないと(アイヌと)主張しても…。(伊達・青年層・男性)
- ・(子どもにはアイヌであることを) 多分伝えないんじゃないですか。[理由はありますか?] とくにないですね。自分が意識してないから。(伊達・青年層・女性)
- ・とくに民族は意識せず生活したい。ずっとそういうふうに来てきたので、今更変えるなんて考えない。(伊達・老年層・女性)
- ・アイヌだけど、別にアイヌ語話さなくても良いなと思ってるからさ。だって今、共通語は日本語でしょ? わざわざアイヌ語覚えてさ、誰に披露するの? っていう感じだから。(白糠・青年層・男性)
- ・普通に、自然に生活していきたいから。アイヌ民族とかじゃなくて俺は地球人だっていうことで。(白糠・壮年層・男性)
- ・アイヌであろうが、朝鮮人であろうが、黒人であろうが、ひとりの人間としてどこの社会においても認められる世界に共通する人間の生き方があると思う。アイヌ文化はちゃんとあるけれど、アイヌ民族だからということではなく、そういう方向に憧れ希望を持っている。(新ひだか・老年層・男性)
- ・別にアイヌ民族だからといって恥ずかしがることもないし、恥ずかしいというわけではないのですけども、普通に生活していければ、別にアイヌ民族であるとか和人であるとかというのは関係ないと思うので。(伊達・壮年層・女性)
- ・恥じることもないし、隠すこともないので。アイヌとして生きていく。アイヌとしてって

うか、普通に。(新ひだか・青年層・男性)

このようにアイヌであることを意識しないという考えの人々は、「血が薄い」、アイヌに関する活動を「何もしていない」などの理由から、そもそもアイヌであることを現在意識しておらず、これから意識するつもりもなく、これまでどおりに生きていきたいという人々が大半を占めている。その他には、アイヌ文化やアイヌ協会の活動などに携わっていないと、アイヌとしての主張をすることにためらいがある、わざわざアイヌ語を覚えても役に立たない、アイヌ民族ではなく日本人あるいは地球人として、ひとりの人間として認められたいと考える人もいた。また、アイヌであることは、「恥ずかしがることもない」「隠すこともない」ので、あえてアイヌとして積極的に生きるというよりは、普通に生活していきたいという考えを持っていた。つまり、エスニック・アイデンティティはほとんど確立していないと捉えることができよう。一方、「とくに民族は意識せずに生活したい」という人々の中には、下記のような思いを持っているケースも含まれていた。

- ・意識しない。積極的ということはないけど、(アイヌとしての文化活動に) あんまり積極的になったら子どもがかわいそうだから。(伊達・老年層・男性)
- ・行事とかは自分から興味を持っているので、参加していこうとは思いますが。昔のアイヌみたいに、自分の家でカムイノミしたりとか、そういう本格的なことはたぶんしないと思うので、その辺はあまり意識しないで。(白糠・青年層・男性)
- ・白糠の三大祭りに出れるだけで俺はそれで良いと思うし。秋サケ漁のマレクね、マレクもやれる時にやれば良いし。生活第一だからさ。(白糠・青年層・男性)
- ・別に「私アイヌですよ」と積極的に生きることもないと思うし。隠すこともしたくないし。何なんだろうな。でも別にアイヌとしての活動はしていきたいなっていう。(新ひだか・青年層・女性)
- ・アイヌだからっていう、ばかにされるようなふうに思われないうに、頑張って生きていきたい。(白糠・壮年層・女性)

まず、アイヌとしての文化活動に参加することによって、子どもに迷惑をかけたくないために、アイヌとしてのアイデンティティを表面化せずに生活をするという語りであるが、子どもに迷惑をかけることがなければ、もっと積極的にアイヌとして生きていきたいという希望を持っていると捉えることもできる。また、アイヌの行事やアイヌとしての文化活動には携わっていきたいが、アイヌとして積極的に生きていくわけではなく、「生活第一」のなかで、「民族は意識せずに生活したい」という位置づけになっているケースも見られた。その他に、アイヌとしての自分自身は認めながらも、アイヌであることを「ばかにされる」ことを避けるために「頑張って生きていきたい」と考え、それはアイヌとしてではなく、一般の生活者としてのアイデンティティともいえるべき意識を持っている人も含まれていた。

このように、全体としての今後のエスニック・アイデンティティとしては、「アイヌとして積極的に生きていきたい」という肯定化とともに、アイヌの人々のなかで「とくに民族は意識せず生活したい」という無意識化が進行していると考えられる。

おわりに

本章では、2008年から2015年にかけて実施されたインタビュー調査とアンケート調査にもとづき、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティの形成と変容を、地域、年齢層、時間軸に沿って検討してきた。アイヌであることの意識は各年齢層において「否定的である」が一貫して減少していること、過去に否定的な意識を持っていた人が、アイヌ文化に触れたり実践したりすることに加え、アイヌを取り巻く社会状況が変化するなかで、エスニック・アイデンティティも肯定的に変化してきた様子を確認することができた。一方で、アイヌであることについて、否定的でも肯定的でもない意識を持つ人々も一貫して存在しており多数を占めている。そうした人々は、アイヌ協会に加入していたとしても、経済的なメリットを得るための加入であり、文化活動には積極的には参加していないという状況も見られた。

もともとエスニック・アイデンティティを有していないケースは、自身がアイヌであることを知らない、あるいはアイヌ文化活動への参加の機会や興味が無い人々であり、こうした人々の存在は若い世代へのインタビューで顕著であった（たとえば「イナウって何ですか？（伊達・青年層・男性）」）。こうした状況は、エスニック・アイデンティティの無意識化をよりいっそう進行させると考えられる。また、エスニック・アイデンティティの希薄化は、アイヌとしての血の濃さが低下していることとも連動している。「血が薄い」ことは、アイヌとして積極的に生きる必要性を感じない要素として語られていた一方で、「親が酋長」「両親がアイヌなので」血統書付きのアイヌ」というように、アイヌとしての血筋が確かであることやアイヌとしての血が濃いことが、エスニック・アイデンティティを肯定的に捉える要素となっていた。しかし、アイヌとしての血の濃さのみが、エスニック・アイデンティティの直接的な要因であるとするならば、和人との結婚がすでにかなり進行している現状において、アイヌとしてのアイデンティティを持つ人々はますます減少していくだろう。

そこで重要となるのが、アイヌ文化への参加・興味を持てるような機会をいかに設けていくかということである。エスニック・アイデンティティの無意識化が進行するなかで、アイヌ文化活動に携わることがなければ、アイヌとしての積極的なアイデンティティを持ちづらい状況は継続していくと考えられる。家族や地域の中で継承されなかったアイヌ文化に触れる機会としては、アイヌ協会で開催されている行事や文化活動があるが、経済面でのメリットを得ることが協会加入の最大の目的である人々が一定の割合を占めていることが明らかになっている。これらのことから、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティの形成には、アイヌ文化の経験のみならず、アイヌの人々が生活を送るうえで直接的に有益である給付貸付事業等の制度を充実させながら、それと連動したアイヌ文化の取り組みが重要になるだろう。そのためには、「アイヌ同士が、アイヌ自身もやっぱり外に向けて発信するっていう意識をもっと持っていかなきゃだめなのかなっていうのは思いますね」（新ひだか・青年層・男性）といった、主体的な意識を持って取り組もうとする若い世代が活動できるしくみを築き上げることが必要である。若い世代を組織化し活躍できる機会を生み出し支えることが、アイヌの人々が肯定的なエスニック・アイデンティティを持つことにつながっていくだろう。

参考文献

- 野崎剛毅, 2010, 「アイヌの血統とアイデンティティ」 小内透編著『現代アイヌの生活と意識——2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 19-26.
- 小内透編著, 2010, 『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その1 現代アイヌの生活と意識——2008 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 小内透・長田直美, 2012, 「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」 小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 169-181.
- 世良尚也・小内透, 2015, 「アイヌ文化の実践環境と文化の担い手」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 83-98.
- 新藤こずえ, 2013, 「エスニック・アイデンティティの諸相」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 51-67.
- , 2014, 「アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 42-61.
- , 2015, 「エスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 33 白糠町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 99-124.

(新藤こずえ)